

# お不動さまの話

佐藤俊明

## 仏・菩薩・明王

今日はお不動さまの眷屬けんぞく・矜羯羅こんがら・制咤迦二童子の開眼供養がおこなわれますので、お不動さまについてお話し申上げます。

お不動さまといえば昔からたいへん人気があります。今日でも、日本全国どこへ行つてもお不動さまを拝むことができます。成田の新勝寺や川崎の平間寺といった有名な大寺院のご本尊もあれば、ごくさきやかなお堂にひつそり鎮座します。お姿もあり、また路傍にたたずむ石像の場合もありますが、いずれも火焰を背にして、右手に剣、左手に綱を持つた忿怒の形相に

はかわりなく、宗派を超えて広く大衆に親しまれています。この点、觀音さまやお地蔵さまとよく似ておりますが、觀音さまやお地蔵さまは菩薩ですが、お不動さまは明王であります。

菩薩というのは仏さまの候補者、やがて仏になるお方のことですが、觀音さまやお地蔵さまは、菩薩でも普通の菩薩ではなく、仏となる資格は十二分に備えておりながら、あえて仏にならず、衆生と苦樂を共にしながら衆生を救済し、一切衆生が救われるまでは仏にならぬという大誓願に生きられる方であります。これに対しても王といふのは、仏の分身、化身で、忿怒の相をあらわし、教化しがたい剛強難伏の者を折

伏し救済する方々であります。

明王といえども愛染明王とか孔雀明王などは皆様のお耳に親しいかと思いますが、お不動さまは数多い明王の中でも中心的なお方であります。

菩薩は仏の候補者、明王は仏の化身でありますので、まず仏についてお話し申します。

お釈迦さまは今から二五〇〇年前、二十九歳で出家し、六年苦行の末、最後は坐禅によって、三十五歳の齢の十二月八日、明けの明星をぐらんになつてお悟りを開かれ仏となられました。仏とは悟った人のこと、理想的な人格者のことであります。お釈迦さまは歴史上この世にあらわれた最初の仏であります。しかし、お釈迦さまには自分をこの世における最初の仏とはなきらず、自分は古仏の跡を歩んだに過ぎないのだといわれました。つまり仏教はお釈迦さまの新発明ではなく、何億年も前、とつくる昔に悟ら



れた過去の仏さま、過去仏から生まれたものだといわれ、過去世にあらわされた仏さまを数多く挙げておられます。そうかと思うと、ご自身が亡くなるとしばらくは無仏世界になるが、五十六億七千万年経つと、兜率天とそつてんで修行しておられる弥勒菩薩の修行が完成して弥勒仏となつて娑婆世界に下生されるといわれ、つまり未来仏を説いておられます。そうかと思うと、お釈迦さまの大慈悲心を現実に具現したいろんな仏さまを世に出現させ、さらには、仏は一人格にとどまらず、森羅万象、日月星辰ことごとくが仏であり、一切を遍く照らす太陽は最高最大の存在として、太陽を象徴化した毘盧遮那仏、つまり大日如来様が説かれるに至るのであります。

ところで太陽はまことに有難い存在で、私たちは太陽なくしては一刻も生きてはゆけないのでして、いわば身体と一体のようなものであります。したがつて特別の場合はともかくも太陽に感謝の気持ちを持つことはあまりないのです。またあまりにも偉大なものですから太陽に甘える気持ちも起きないのでです。たとえばわが家の南隣りに高層建築が出来て日が当らにくくなつたからとて、「太陽さん、太陽さん、今までどおり日光を恵んでくださいな」と言つてもそれは通じない願いであつて、太陽は公平無私、私情は一切受けつけません。これはあたり前のことですが、人間これでは満足できないのです。

### 三 輪 身

大日如来は太陽のようにあるに最も崇高で威厳があるので、甘えられない。そういう仏の姿を自性輪身じじょうりんじんというのであります。自性とはおのずからなる性格、性質のこと、輪とは法輪、つまり仏法のこと、身は身体のことなので、天地自然のありのままの姿を示す仏のことを自性輪身といふのであります。自性輪身を見て悟れる

人は、いわばノーベル賞を受けるくらいの優秀な人で、一般の人にはとりつく島がないのです。或る人が明惠上人に、私は今落ち込んでおります。なんとか運が開けるようにご祈禱してくださいと頼みましたところ、明惠上人は、「私は朝夕すべての人びとが幸せになるよう祈禱しているから、さだめし御身もその中にはいついるはずだから、別して祈る必要はない。また、叶うべきことなら叶うであろうし、叶うまじきことなれば仏の力も及ぶまい」と答え、さらに「身を正しく在るべきようふるまえは神仏は護りたまひ、願望は成就するであろう」と諭されましたということですが、そう諭されて、「はい、わかりました」と気持ちの整理のできる人はごく少なく、そこをなんとかと願う心があるから、ご祈禱が繁昌し、そのためにこそ寺や神社にお参りする人が多いのです。それが証拠には、お参りの仕方を見ていると、百円じゃもつたいないな

いとばかり、十円硬貨を探し出して賽銭箱に投げ入れ、一千万円の宝くじが当るようについてたたぐいの願をかける人が多いのです。このような人間の願いにこたえて、仏さまはやさしい菩薩の姿をあらわすのです。それを正法輪身といいます。正法とは正しい仏法のことで、正しい仏法をわかりやすく説いてくださるお姿のことです、自性輪身である大日如来は正法輪身として般若菩薩の姿をあらわすのです。菩薩はいわば母親の姿であります。子供の甘えをやさしく受け入れ、その甘えの中から伸ばすべきものは伸ばし、矯めるべきものは矯めてゆくように、やさしく衆生を導いてくださるのです。ところが子供は成長するにしたがい、ともするとやさしい母親を甘くみて、言うことをきかなくなります。そこで必要になつてくるのが父親のきびしさであります。嚴父慈母という言葉がありますように、子供の教育にはやさしい母の愛情と

ともにきびしい父親の威厳がなくてはなりません。それと同じようにやさしい菩薩の教えに耳を貸さないで悪事をかさね、いよいよ仏から遠ざかってしまう人も少なくないのです。そこで忿怒の形相をもつて是が非でも引張ってゆく導き方が必要になつて来るのに対して、そういう仏の姿を教令輪身というのであります。教とは教え、令とは命令の令で、命令、号令で教え導いてゆくという意味で大日如来は教令輪身としてお不動さまの姿をあらわすのであります。円満崇高な自性輪身では近寄り難く、柔和な正法輪身では甘えてしまう。そこで忿怒の形相ものすごいお不動さまのお出ましとなるのであります。

隊から中支南京の部隊に転属することになり、私の所属する部隊から軍曹以下五十名、他の部隊から曹長以下五十名、併せて百名の下士官、兵を引率して赴任することになりました。私の部隊は軍紀厳正な部隊でしたので、お別れの儀正も早々に済ませ、発車一時間前には新京の駅にはいりました。ところが別の部隊の五十名が中々やつて来ません。十五分前ごろになつてようやくバタバタとホームに入つて来ました。一見して酒を飲んでいることがわかりました。私はホームの中央に仁王立ちになつて、

「待て！引率者は誰か？」

と怒鳴りました。すると赤い顔をした曹長が駆歩で私の前に来て拳手の敬礼をし、「ハイ、蜂須賀曹長であります」と言う。私は

「申告せい！」と叱咤しました。

軍隊では身辺に異動が生じた場合は「陸軍××何某、今般何々を命ぜられました。こ

「に謹んで申告します」というように必ず上官に申告するのがきまりです。蜂須賀曹長、はつと気付いて、改めて拳手の敬礼をして申告しようとした。私は、

「馬鹿もん！お前だけの転属じやないだろう」と怒鳴りつけました。

蜂須賀曹長、いよいよあわてて、五十名を一列横隊に並らべ、「輸送指揮官殿に敬礼、かしら頭、



中!!」「申告します。○○部隊蜂須賀曹長以下五十名は南京××部隊に転属を命ぜられ、只今到着しました。ここに謹んで申告します」と型通り申告しました。そこで私は“休め!!”“氣を付け”と号令をかけ、軍刀を抜き、お不動さまのように剣を腰にかまえ、

「私は輸送指揮官の佐藤中尉である。お前たちを南京まで輸送する一切の責任を負う。よつて只今より輸送指揮官の命令、指示以外に一步も出ることを許さん。違反した者は容赦なく処断する。注意、一つ、南京に到着するまで一滴たりとも酒を飲むことを禁ずる。一つ、持つて来た酒は全部前に出せい。南京まで預る」と、お不動さまよろしく忿怒の形相をもつて臨んだのです。驚いたことに随分たくさんのお酒を持って来ておりました。軍紀の弛緩した部隊で、見送りに来た部隊副官も中隊長も私の威厳に圧倒されて小さくなつておりました。この時、お不動さ

まの威厳を示さなかつたら統制がとれなかつたことと思い、お不動さまの身を以て示される教えの有難さをしみじみ感じた次第でした。

にくしとてたたくにあらず 雪の竹

今日の社会にいま少しお不動さまの慈悲があつたら問題の青少年の数は半減することあります

しよう。

### アチャラ・ナータ

お不動さまはもともとインドの仏さまで、梵語でアチャラ・ナータといいます。アチャラは動かないこと、ナータは尊いお方という意味です。ところがお不動さまの姿は尊いお方とは似ても似つかない召使いの姿であります。これは仏として最高の位にある世にも尊い大日如来が剛強難伏の者を救うために示された尊い慈悲心のあらわれとみるべきであります。そこでまずお不動さまのお姿を拝見することにいたしまし

よう。まず頭の上には七莎髻しちしゃけいのあるものと、八

弁の蓮華をいただいてるものがあります。七莎髻とはインドの原野に自生している莎草を用いて髪を七つに束ねていることであり、これはインドの奴隸の風習だといいますが、七つに結んでいるのは七代生まれ變つて主人に仕える心をあらわしたものであります。また、インドでは六をもつて宇宙の完俗性を示し、七は再生であり、無限につらなるということを意味し、さらには永続性・永遠のシンボルだといいますので、七つに結髪するお不動さまは大日如来まさに永遠にお仕えし、無限に活動する姿といわれます。

次に八弁の蓮華、八つの花びらを持つ蓮華をいただくのはどういう意味かというと、八弁の蓮華は蓮華藏世界を表わすものとされ、蓮華藏世界は大日如來の世界であります。したがつて八弁の蓮華をいただくことは大日如來を頭上に

いたしたことなのです。

次に束ねられた髪が左の肩に垂れております。これは慈悲の象徴だといわれ、私どもがその一髪にとりすがると、たとえ極悪人でもその苦惱から救われるというのであります。

それから額に水波すいはのしわがありますが、これはほかの仏像には見ることのないお不動さま独特の特徴で、迷つている衆生を心配している印しまし、あるいは怒りをあらわしているともいわれます。

目は左の目をかすかに閉じ、半開の右の目で睥睨へきにしているものと、或いは両眼をカツと大きく見開いているものと二種類あります。右の目を半分開いているものは二つの牙を上下につき出しており、両眼を見開いているものは二つの牙を上または下に突き出しております。口は閉じて一文字に結び、下唇の左の方を外にひるがえしております。これは相手に恐怖を感じさせる



ものであり、さらには役に立たない無駄話をしないということをあらわしたものであります。

右手の剣は智慧と力のシンボルで、この剣は特に俱利迦羅剣といって俱利迦羅龍王が刃に巻きついているものもあります。これらは仏教の基本原理である中道を悟らせる智慧の剣であると共に、煩惱を断ち切る降魔の剣でもあります。左手の縄索は慈悲の表示でこの縄で凡夫を縛り、引張つて菩提に導くのであります。

最後にお不動さまは大火焰を背にして磐石の上に坐るか、又は立つております。何物も冒し難い不動の姿勢であります。大火焰は忿怒の形相をより具象的にまた効果的に表現したものであり、あらゆる煩惱を焼きつくす威力をあらわしたものであります。

このように激しい怒りとはかり知れない力の象徴にはいかに剛強難伏の者といえども圧倒されるのであります。

## 五大力と眷属

お不動さまは東西南北に四人の仲間を持つております。これにお不動さまを加えて五大明王とか五大力といつてますが、いずれも悪魔降伏と仏法守護にあたる方々で、

東方は降三世夜叉明王、阿閦如來の化身

南方は軍荼利夜叉明王、宝生如來の化身

西方は大威德夜叉明王、阿彌陀如來の化身

北方は金剛夜叉明王、不空成就(釈迦)如來の化身

で、お不動さまは真ン中におられます。

なお東方の阿閦如來、南方の宝生如來、西方の阿彌陀如來、北方の不空成就如來つまりお釈迦さま、それに中央の大日如來を加え五智如來といいます。

次にお不動さまは、三十六童子、八大金剛童子といつて、手となり足となつて下働きをする

眷属を持つております。中でも代表的なもので、常にお不動さまの身辺にはべり犬馬の労をとるのが矜羯羅・制咤迦の二童子であります。名前を覚えにくい人は「小柄な童子」「背高のつば」を連想すれば忘れても思いだせるでしょう。童子ですからいざれも中学生年輩で、矜羯羅童子は蓮華の冠をつけ、合掌して独鉢を指の間にはさみ、天衣と袈裟をかけております。この童子は小心・隨順といわれ、やさしい顔をしております。これに対し制咤迦童子は頭に五髻を結び、右手に金剛棒、左手に金剛杵を持つております。この童子は瞋心・惡性といわれ、にくにくしい顔をしております。お不動さまはこの二童子の特徴をよく使い分けて衆生を救われるのです。これらの眷属はそれぞれ一千万の童子を從えているといわれます。

『不動經』に「聖無動の眷属、三十六童子各々千万童を領す。本誓悲願の故に千万億の悪鬼、

行人を燒乱せん時、此の童子の名を誦すれば、皆悉く退散し去らん、者し苦厄の難、呪咀病患

有らん者は、當に童子の号を呼ぶべし、須臾にして吉祥を得ん、恭敬礼拝する者は、左右を離れず、影の形に随ふが如く護ら、長寿の益を獲得せしむ」とあります。

お不動さまの家来の三十六童子はおの千万人の童子を従えている。本来の誓いである悲願のゆえに、たとえ千万億の悪魔が修行者をたぶらかそうとしても、この童子のお名前を唱えれば悪魔は皆残らず退散してしまう。もしも苦労や因難、呪いや病気のあるものは、まさに童子を名号を呼べば、ときを移さずに吉祥を得るであろう。つつしみうやまつて礼拝するものは、その人のそばを離れずに、影の形に従うようにして護り、長寿のご利益を獲得させてくださる。というのであります。したがつて矜羯羅・制咤迦の二童子を迎えてお不動さまのご威光はいよ

いよ輝きを増すことありますよう。

## 身代不動明王

お不動さまは多くは真言宗の寺に祀られるのですが、禅寺の当山にどうしたご縁があつたのでしょうか。それは今から二十三年前のこと、方丈さまは永平寺、總持寺の両大本山で修行なされ、タイに修行に出かけようとなされたのです。が、その当時はタイといえば悪疫瘴癪の地で、わずか一週間程度の旅行でもいろんな注射をして出かけなければなりませんでした。ましてやその地で一年以上も修行するとなればさら命がけのことであります。そこで方丈さまは守り本尊を作つて、仏さまにお護りいただこう。方が一命を失なうようなことがあつたら、親には申証ないがせめて身につけていた仏さまだけは無事帰つていただこうと思い、守り本尊をどこの誰に彫つてもらおうかと思案した時、ふと、



永平寺で修行していた際、福井駅に素晴らしい一葉觀音の彫刻が展示してあつたことを思い出したのです。

一葉觀音というのは、道元禪師が中国から帰国途中、大暴風雨に遭い、船はいまにも難破しそうになつたのです。その時道元禪師は一心になつて觀音さまを念じられました。すると波間に蓮の葉に乗つた觀音さまがあらわれ、波をしずめてくださつた。そのおかげで無事帰国できましたので、道元禪師はその觀音さまの姿を仏師に描かせたのであります。それを模刻したのが福井の駅にあつたのです。それで方丈さまで「誰が彫つたのですか」と駅員にたずねました。すると「おお、おお、おお、おお」と山口さんとおなじです。どうか私にこのお不動さまをお授けください」というんだそうです。ところがどうしたわけか山口さん、どうしてもそたものと知らされ、早速仏師の許を訪れ、「お守りにしたいから一葉觀音を彫つてくれ」と頼んだのでした。その時山口さんから、「あんたどこから来た?」と聞かれたので「目黒」と答えた

そうです。方丈さんは当時五反田の桐ヶ谷におられたのでそう答えたのです。すると「目黒のお不動さんの体か!」といい「このお不動さんを持つて行ってくれんか」というのだそうです。

「ついせんだつて、四国から靈能者が訪ねて来て言うには、『お不動さまが夢枕に立ち、『福井の大きな寺の近くに彫師がいる。その彫師の彫つたお不動さまをお迎えせよ』」といふので、はるばる四国からやつて参りましたが、お宅に来ておどろいたことには夢のお告げに出たお不動さまと全く同じです。どうか私にこのお不動さまをお授けください」というんだそうです。ところがどうしたわけか山口さん、どうしてもそだそうですが、日が経つにつれてそれが気になつて仕様がなくなつた。丁度そのへ方丈様が行われたものですから、「持つていつてくれ」とい

うようなことになつたわけです。そこで、それではということでお不動さまを譲り受けることになつたのです。方丈さまも真剣に頼んだのでしようし、山口さんもこの人ならと見込んだのでしよう。そして、お受けはして来たものの祀るところがありません。それで本寺の光真寺様にお祀りしていただきことをお願いして、タイに行き、引続きアメリカに渡り、帰つて来てようやく小さいながらも本堂ができましたので、光真寺さまにお預り願つてお不動さまをここにお遷ね申上げたわけです。

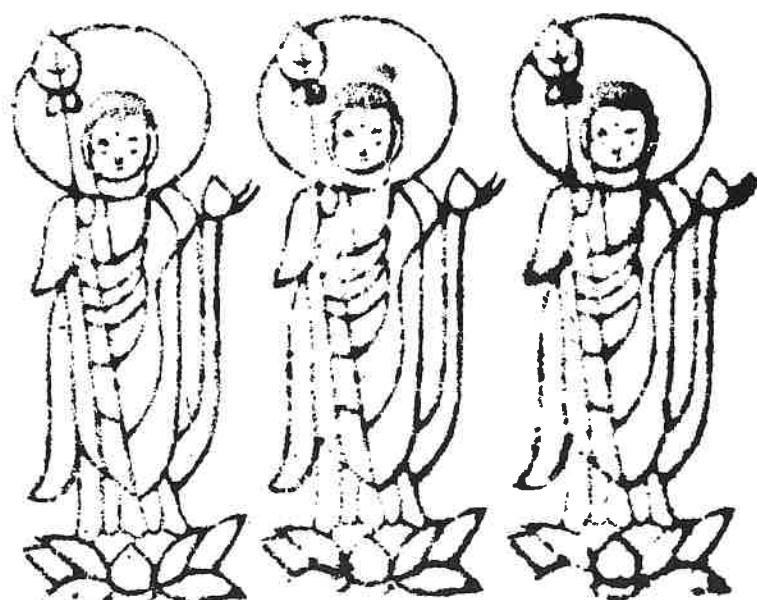
このお不動さまは、身を七つに変じて方丈さまが困つた時は必ず救つてくださるというお告げだというのです。

方丈さまが身代不動さまをお迎えする時、夢を見られた。その夢というのは、鶴見大本山總持寺が燃えているんです。こりあたいへんだ、ということで、お師匠様、黒田白

純大和尚様は、總持寺顧問会の会長でしたので、お師匠様に連絡し、案内して駆けつけたところ、總持寺は焼けておらず、勅使門のうしろの長廊下の中雀門のところにお不動さまの台座だけが残つており、お不動さまが身代りになつて焼けた總持寺を火災から守つたといふんだそうです。そうした不思議な夢を見て以来、お不動さまは善光寺に関する限り常に身を変じてどんな願いでも叶えてくださると、方丈さま確信されたのだそうで、今日の当山の奇蹟的な発展はお不動さまのおかげだと、自らも堅く信じ、常に人们にも語つておられるところであります。それほど有難いお不動さまをお祀りしているのに、これまで十八年もの間、お不動さまを一人身にしておき、使い走りをする矜羯羅、制咤迦の二童子をお迎えしなかつたということは遅きに失しているではないかという人もあろうかと思ひますが、私はそうは思いません。というのは、

方丈さまは、矜羯羅童子、制咤迦童子になり切つてお不動さまにお仕えしてこられたのであります。次々と奇想天外な企画をし、一寺院の粹を越えた大事業を展開してこられたその姿はまさにお不動さまにお仕えする二童子の姿そのものといえるのであります。しかし、方丈さまは来年五十歳になります。五十ともなると身体のおどろえを感じる年頃であり、今までのように二人前三人前の仕事は無理になつて來ます。この時に当り、大仏師錦戸新觀先生に制作の御快諾を得て、まことに素晴らしい二童子の尊像をお迎えでき、本尊身代り不動明王をお迎えするまで四、五年の間お祀りくださった本寺光真寺の方丈さまを煩わして開眼供養がおこなわれましたことは誠に意義深くまた有難い勝縁であります。

当寺に今日の隆盛をあらしめた身代不動明王さまは、いまここに矜羯羅、制咤迦の二童子を



身近かにはべられることができる、いよいよ靈験あらたかなおはたらきをしてくださることと信じます。どうか皆様方も足しげくお参りしてお不動さまに対する信心を一層深め、より豊かな、より意義のある人生を歩まれんことをお願いします。

### 『不動経』に

我が身を見る者は菩提心を発さん

我が名を聞く者は惑を断ち善を修せん

我が説を聴く者は大智慧を得ん

我が心を知る者は即身成仏せん

とあります。お不動さまのお姿に接し、お不

動さまのお名前を聞き、お不動さまの教えに耳を傾け、お不動さまのお心を知つてこそ素晴らしい人生が開けてくるのであります。どうかそうした人生が開けますよう今後の御精進をお願いして話を終えます。

